

# 『行動経済学とはどういう学問か』

京都大学大学院経済学研究科 教授

依田高典

## 1 行動経済学の 人気に迫る

今、行動経済学が巷で人気です。行動経済学は、伝統的経済学が想定してきた完全無欠の合理的経済人（ホモエコノミカス）を乗り越えて、現実的な人間の経済心理に注目し、生き生きとした経済学のフロンティアを切り拓いています。人間は、弱い生き物です。合理的に生きたいと願いながら、目の前の誘惑に心を奪われてしまい、長い目で見たより大きな満足達成できないでいます。例えば、健康に気遣って、ダイエットをしようと思っても、



美味しそうなケーキ屋さんの前を通ると、ケーキの一つくらいなら、目の前

の誘惑に負けてしまいます。後悔先に立たずとは、よく言ったもの。行動経済学は、そうした心弱い存在に寄り添い、どう行動するべきかについて考えさせてくれる学問なのです。

行動経済学の人気に拍車をかけたのは、数度にわたるノーベル経済学賞の受賞でしょう。ノーベル賞の権威は凄まじいもので、行動経済学者が受賞する度に、行動経済学が馴染みやすい話題であることも相まって、テレビ、新聞、雑誌で度々特集が組まれます。1978年に同賞を授与されたハーバート・サイモンは、「限定合理性」という概念を考案しました。限定合理性とは、経済学が仮定するような効用の最大化を達成できるほど合理的ではなく、せいぜい効用の満足化に甘んじざるを得ないことを意味します。サイモンは、限定合理性のために、人間はヒューリスティックス（経験則）を手がかりに行動すると考えました。ヒューリスティックスとは、選択の損得をあれこれ時間をかけて考えるのではなく、経験や勘を手がかりに決めてしまうやり方です。

サイモンは、組織論や人工知能にも大きな貢献を残しましたが、自身の考えを十分に発展させることなく、経済学から次第に距離を置くようになりました。サイモンの後を受けて、行動経済学の立役者となったのが、イスラエル出身の心理学者ダニエル・カーネマンとエイモス・トヴェルスキーです。物静かなカーネマンと才気煥発なトヴェルスキーの二人は、全く異なる個性の持ち主ながら、二卵性双生児のように寄り添い、心理学の立場から経済学を刷新しました。彼らは、「アノマリー（異例）」という概念を考案し、人間行動の不思議を解き明かしたのです。例えば、アンカー（錨）効果と呼ばれるアノマリーがあります。人間の情報処理は、中立的ではなく、情報の与えられ方に左右されるというものです。富士山は3千メートルよりも高いか低いかと聞かれた後に、正確には何メートルかと聞かれると、3376メートルと答えてしまうのです。4千メートルよりも高いか低いかと聞かれた人の多くは、3776メートルと正しく答えます。これがアンカー効果の



2017年ノーベル賞受賞のリチャード・セイラー（ロイター=共同）

なせる技です。これらを唱えた二人ですが、1996年にトヴェルスキーが夭折（ようせつ）2002年にカーネマンだけがノーベル経済学賞を授与されました。

そして読者の皆様もご存じの通り、2017年、リチャード・セイラーがノーベル経済学賞を授与されました。セイラーは、カーネマン達の追っかけとして、行動経済学に興味を持ち、「ナッジ（肘で突っつくこと）」を使って、人間の行動を望ましい方向に誘導する政策を提唱して注目さ

れました。セイラーは、相田みつを氏の「にんげんだもの」という言葉が大好きだというエピソードからも分かるように、学者らしからぬ親しみやすい人柄で知られています。ナッジについては回を改め、連載第4回で特集する予定です。

## 2 「今この瞬間」に特別の意味を感じる

それでは、行動経済学で特別に重要なアノマリーを紹介したいと思います。最初のアノマリーは、人間が今この瞬間を特別に重要視するという「現在性効果」です。まず、次のような二者択一問題を考えて下さい。選択肢Aと選択肢Bのどちらを選びますか。

選択肢 A 今すぐ、10万円を受け取る。

選択肢 B 1年後に、11万円を受け取る。

毎年、私は、京都大学の行動経済学の受講生に、この質問をしますが、80%の学生が選択肢Aを選びます。人間は誰でも待つのは嫌なもので、金額よりも今すぐを重視するというのがです。続いて、次のような二者択一問題を考えて下さい。選択肢Cと選択肢Dのどちらを選びますか。

選択肢 C 1年後に、10万円を受け取る。

選択肢 D 2年後に、11万円を受け取る。

驚いたことに、今度は、京大生の80%が選択肢Dを選びます。1年余計に待っても、1万円多い方を選びます。どうせ1年待つだけだから、1年も2年も一緒だと考えるようです。

この京大生の選択は、経済学者には困った課題を突きつけます。なぜならば、二つの択一問題とも、1年待つて1万円多く受け取るべきかどうかという同じ選択肢構造を持っているのに、両者の間で時間上の選好が逆転するのです。なぜ選好の逆転が生じるのでしょうか。鍵は、選択肢Aの現在性にあります。人間は、今すぐが選択肢の中に入ると、忍耐することができずに、特別にその選択肢を好みます。しかし、一度、待つことを織り込んでしまえば、どうせ待つのなら、もう1年くらい待つのも一緒だと割り切ることができるのです。

念のため、もう一つ二者択一問題を考えて下さい。選択肢Eと選択肢Fのどちらを選びますか。

選択肢 E 2年後に、10万円を受け取る。

選択肢 F 3年後に、11万円を受け取る。

選択肢Dを選んだ人は、ここでも選択肢Fを選び、選好の逆転は起こりません。一度、待つことを覚えた人間は、以降も同様にずっと待ち続けることができます。選好の逆転が起きるのは、現在性を含む時だけなのです。

人間は誰でも、現在性効果という心のクセを持っています。そのために、例えば、将来の健康のために、ダイエットをしようと思っても、目の前にある誘惑に負けてしまふのです。汝自身を知れと言いますが、誘惑に弱い心のクセを知ることが大切です。誘惑に負けそうな時に、現在性効果のことを思い出して、どちらが得か、もう一度考えるクセを付けましょう。人間は一度待てるようになれば、しっかりと忍耐できる心の強さを持っているのですから。

## 3 「100%確実」に特別の意味を感じる

もう一つのアノマリーを紹介したいと思います。ここで紹介するアノマリーは人間が100%確実を特別に重要視するという「確実性効果」です。まず、次のような二者択一問題を考えて下さい。選択肢Aと選択肢Bのどちらを選びますか。

選択肢 A 確率80%で、4万円を受け取る。

選択肢 B 確率100%で、3万円を受け取る。

80%の京大生が選択肢Bを選びます。数学的期待で考えれば、選択肢Aの方が上ですが、選択肢Aの20%の何ももらえないリスクを嫌って、選択肢Bを選んで確実に3万円をもらおうと思つのです。

続いて、次のような二者択一問題を考えて下さい。選択肢Cと選択肢Dのどちらを選びますか。

選択肢 C 確率20%で、4万円を受け取る。

選択肢 D 確率25%で、3万円を受け取る。

驚いたことに、今度は、京大生の80%が選択肢Cを選びます。確率20%にしても、確率25%にしても、高い確率ではありません。それならば、いっそ1万円でも金額が高い選択肢Cの方に賭けようと思つのです。

この京大生の選択も、経済学者には困りものです。なぜならば、二つの択一問題とも、賞金の金額は同じで、確率の比率も4:5という選択構造を持っているのに、両者の間で確率下の選好が逆転するのです。なぜ選好の逆転が生じるのでしょうか。鍵は、選択肢Bの確実性にあります。人間は、確実性が選択肢の中に入ると、わずかなリスクを回避して、特別にその選択肢を好みます。しかし、一度、リスクを織り込んでしまえば、少しくらいの確率の高低は大きな違いではないと割り切ることができるのです。

念のため、もう一つ二者択一問題を考えて下さい。選択肢Eと選択肢Fのどちらを選びますか。

選択肢 E 確率10%で、4万円を受け取る。

選択肢 F 確率12.5%で、3万円を受け取る。

選択肢Cを選んだ人は、ここでも選択肢Eを選び、選好の逆転は起こりません。

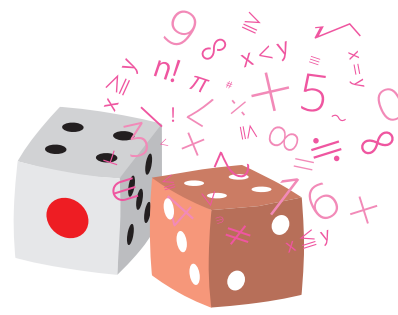
一度、リスクをとることを覚えた人間は以降も同様にずっとリスクをとることができません。嗜好の逆転が起きるのは、確実性を含む時だけなのです。

人間は誰でも、確実性効果という心のクセを持っています。頑張つてダイエットしようとしても、将来の健康の便益にはリスクがつきもので、確実なケーキの魅力の前にはかすんでしまいがちです。ここでも、誘惑に負けそうな時は、確実性効果の罠を思い出して、小さな満足よりも、大きな満足を優先できるように、自分にとって本当に大切なものは何かを考えられるようになります。

#### 4 実は合理的な限定合理性!?

行動経済学が明らかにしてきた通り、人間は限定合理的な存在です。目の前の現存性や確実性に目が眩んでしまい、長期的な視点から、より良い選択肢を選ぶことに失敗しがちです。人間はなんと愚かな生き物かと思つてしまいます。私自身も、大学院に進学し、行動経済学研究を始めた最初の10年間、ずっとその思いに囚われてきました。京都大学で日本最初の行動経済学(経済心理学)の講座を継承しながら、学生に講義をしつつ、なぜ人間は愚かなまま進化してきたのだろうか、そこには何かしらの進化論的合理性が存在してきたのではないだろうかと考え続けました。

今では、このように考えています。伝統的経済学の考える合理性は、何度もやり直しがきく確率論的な世界です。ですから、サイコロを振るように、数学的期待値を最大化するホモエコノミカスが幅



をきかせてきたのです。実際の世界は、時間から過去から現在、未来へと不可逆にしか流れません。一方

向の時間の向の時間の中では、一度の重大な失敗をやり直すことができません。また、灯りのない太古、夜道に禽獣に襲われれば、人間はあつという間に重傷を負つたことでしょう。幼子が感染症にかかれば、はかなくも命を落としたことでしょう。繰り返しのきかない時間の矢の下で、現存性や確実性は人間が遺伝的に受け継いできた自己防衛手段だったので、つまり、現存性効果や確実性効果に従う方が人間の生存確率を高めてきたと考えられます。逆説的ですが、人間の限定合理性は、進化論的に見れば、合理性を備えていたのです。

しかし、考える存在である人間は、文明を発展させてきました。産業革命以降の数百年で、人間は電気力で、夜の闇

を克服しました。公衆衛生の改善や抗生物質の発明で、長らく人間を苦しめてきた恐ろしい感染症に対しても、大きな抵抗力を獲得しました。知は力なり。科学技術の発達で、時間の矢は、部分的にせよ、克服されてきたと言えるでしょう。

環境は劇的に変化しました。しかし、人間の遺伝子は、現生人類(ホモサピエンス)の誕生以来、数十万年、ほとんど変化してきていないと考えられます。つまり、太古においては、進化論的に意味のあつた現存性効果も確実性効果も、今となつては無用の長物と化したにもかかわらず、我々の遺伝子の中で保存されています。現存性や確実性に囚われていては、ダイエツトに失敗してしまいます。受験競争にも、出世競争にも、勝ち抜くことが難しいでしょう。こうして人間は本能の呼び声を抑えて、禁欲的に生きなければならなくなりしました。

進化心理学では、こうした人間の宿命を

「エプソンの園追放仮説」と呼びます。なんと上手なネーミングでしょう。リングを食べて、知恵を持ったために、楽園を追放されたアダムとイブの物語のように、人間は理性と感情の葛藤に苦しめられる宿命を負つたのです。

行動経済学はとても魅力的な学問だと思えます。当初、行動経済学は、伝統的経済学の合理性に反旗を翻す異端の立場から生まれてきました。しかし、人間の限定合理性の起源に思弁を馳せる過程で、思いもかけず、行動経済学者は人間の進化論的合理性を発見したのです。人間は、確かに弱い存在ですが、そうした心の弱さを呪つても嘲つても得られるものは多くありません。それよりも、自分の心の弱さも、大切な自分の一部であると受け止めて、長い目で自分なりの幸福を追求していけば良いのです。人生にただ一つの答えはありません。一人一人の自己実現こそ大切なのです。



京都大学大学院経済学研究科 教授 依田高典 (いだ・たかのり)

#### プロフィール

1965年、新潟県生まれ。1989年、京都大学経済学部卒、1995年、京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士(経済学)。現在、京都大学大学院経済学研究科教授。その間、イリノイ大学、ケンブリッジ大学、カリフォルニア大学客員研究員を歴任。専門は応用経済学。情報通信経済学、行動経済学の研究を経て、現在はフィールド実験とビッグデータ経済学の融合に取り組む。主な著書に『Broadband Economics: Lessons from Japan』(Routledge)、『スマートグリッド・エコノミクス』(有斐閣)、『ブロードバンド・エコノミクス』(日本経済新聞出版社)、『行動経済学』(中公新書)、『「ココロ」の経済学』(ちくま新書)等がある。日本学術振興会賞、日本応用経済学会賞、大川財団出版賞、ドコモモバイルサイエンス奨励賞等を受賞。